

「禍福に門なし」。苦境を、降りかかった 災難と思わず、自ら背負う。そんな姿勢が、 明日につながるのではないのでしょうか。

株式会社 京都放送 専務取締役
1970年 経済学部卒業

ち し ろ ま さ み
千代 正實さん

**取締役退任を選択。
「従業員として奔走」**

1994(平成6)年、京都放送は会社更生法の適用を受けた。当時千代氏は46歳。取締役を辞任して2年後のことである。自主再建が否かで揺れる経営陣の内、取締役の退任を決意。その後、取締役から「従業員として京都放送に残留することを選んでいた。

「辞めてしまふという選択肢もありました。しかしそれでは責任を放棄したことになる。バブル期の経営に問題があったとはいえ、京都放送には長年にわたって培ってきた有形無形の“財産”があり、立ち直

る可能性を持っている。ともかくにも、会社の債務処理、そして一緒に働いてきた仲間たちの行く末に目鼻をつけるまでは、留まろうと思ったわけです。

昨年、古巣の(株)京都放送に専務取締役として9年ぶりに復帰した千代正實さん。千年の都・京都ならではの放送局のあり方を追求し、「会社おこし」とも言える新たな取り組みを意欲的に進めている。「私が入社した頃の京都放送はラジオ全盛の時代。今もラジオには格別の愛着があります」と、しばしばスタジオに向き、笑顔で若いスタッフたちと言葉を交わす千代氏の姿から、その波瀾万丈の仕事人生を想像するのは難しい。

Portrait 07

京産大マインドを持ち、活躍している方々にインタビュー。
その言葉から、あなたのめざす世界が見えてくるかもしれません。

その頃、千代氏の脳裏にたびたび去来したのは、大学時代、図書館で読んだ『貞観政要』という書物の一節だった。「中国、唐の太宗帝という名君の言行を記録した本の中に、“禍福に門なし”という言葉があります。禍いも幸せも、勝手にやってくるものではない。みんな自分が引き寄せているのだ、といった意味です。会社の危機は確かに大変な事態だ。しかしそれを“禍”とするか、“福”とするかは、私自身の心の持ちようにかかっている、と自分に言い聞かせたものです。

逆境にある時こそ胸を張り、視線を高く広く向ける。そんな姿勢も、大学時代に学んだことのつだと千代氏は言う。「まだ誕生して間がない大学ということもあり、先生方が学生にありつたけの情熱を注ぎ、学問だけでなく、人としていかに生きるべきか“を、身をもって示し、導いてくれました”。

すばらしい人格に触れ、 薫陶を受けた学生時代

現在、千代氏は専務取締役として、愛着のあるラジオ部門を統括しながら、今年10月に会社更生法の適用を終える京都放送の「第二創業」に向け、さまざまな取り組みを進めている。

「源氏物語」にも登場する秋の七草、フジバカマ。今では絶滅危惧種に指定されています。この可憐なフジバカマを三年計画で、冷泉家や大原野神社に生育する原種を挿し芽で増やし市中を飾ったり、京野菜・賀茂茄子を種から育て、KBS朝市で販売したり、有名レストランに提供する。これらを中澤社長や私たち役員も含めた社員自身が自分たちの手で行っています。さらにこれらの一連のプロセスを番組と連動させ、京都の人々に京都が育んだ本物の文化や伝統を再認識してもらおうと考えています。

「一方的に“放ち送る”のではなく、京都のまち・人と緊密なレスポンス関係を築きながら、地域の発展に貢献する」。京都だからこそ可能な、放送の新たなカタチをつくりあげる挑戦は、千代氏の放送人としての集大成でもある。

「京ならではの放送局」の 新たなカタチを模索

株式会社 京都放送 専務取締役
千代 正實さん

プロフィール

1948(昭和23)年、滋賀県生まれ。
1970(昭和45)年、京都産業大学経済学部卒業、
(株)近畿放送(現・京都放送)に入社。
取締役テレビ編成局長等を経て
1997(平成9)年、同社を退職。(株)ケービーエス京都
プロジェクト代表取締役就任。
2006(平成18)年、(株)京都放送専務取締役に就任。



京都放送のエントランス
わきで元気に成長する
フジバカマ。



◀ 京産大プキメッセージ

TVの深夜放送で韓流恋愛ドラマを観て感動、号泣してしまいました。(法学部1年次生 村田 幸司さん)